

<神谷傳兵衛の名言>

<傳兵衛クラブ 刈谷 2025.2.19>

坂本箕山著「神谷傳兵衛」(大正10年1月発刊)から

P-80 畑作物使用原料酒類製造上の功績「神谷傳兵衛の宿論」(明治20年頃)

田作物原料の酒は銀、畑作物原料の酒は金と称えてよかろう。

我が国の人口は年を遂うて夥(おびただ)しく増加するもその主食物たる米は、人口増加の割合に産額を増さぬ。のみならずその主食物たる米が、清酒の原料として使用される額は、実に莫大なるものがある。故に米の需要と供給とは均衡を保たず、米価は次第に騰貴して底止するを所を知らぬ。若し此の田作物原料の酒に代わるに、畑作物原料の酒をもってせば、それだけ米の不足を補うことが出来る。而(しか)して田作物を原料とする酒は、醸造酒にては清酒と味醂の二種、蒸留酒にては焼酎(實取・粕取)のみであるが、畑作物の雑穀、果実、芋類、陸穂(おかぼ)米等を原料とする酒は、醸造酒にては葡萄酒、シャンパン、林檎酒、梨酒、麦酒、味醂酒等で、蒸留酒にてはコギヤック、ジン、オルトン、ラム、ベルモット、ウイスキー、リキウル、焼酎等である。

而(しか)も、田作物原料の清酒は、飲用期が短く一年を限度とし、其の以上は、古酒として持ち越されぬ特性である。畑作物原料の酒は、年数を経れば経るほど、品質が優良となり、価格が昂騰し、かつ外国人の嗜好にも適して輸出品ともなる。

されば、田作物原料の酒は「銀」、畑作物原料の酒は「金」と称えてよかろう。

P-218 刈谷に「東洋耐火煉瓦工場」を建設するにあたり工場長兼技師長として大野一造に任せた際に神谷傳兵衛が一造に熱く語った言葉です。(大正8年)

「製品を初めて市場に送り出すには、充分良心的自信のあるものでなくてはならぬ！」

初めて出した製品で評価されるものである。一度不評をとったならば、その回復は容易なことでは出来ぬものだ。本社から製品を早く出すように言ってきたも、君の自信がつくまでは出荷してはならぬ。」

大野一造はこの時、神谷傳兵衛が「ブドウ酒王」たりし貴き経験の持ち主であることを痛感したという。